



Data 2023-65

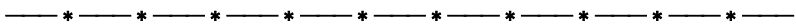
監督：樓一安(ロウ・イーアン)
 脚本：樓一安(ロウ・イーアン) / 陳芯宜(チェン・シンイー)
 出演：黃聖球(ホアン・シェンチョウ) / 莫子儀(モー・ズイー) / 黃姵嘉(ホアン・ペイジャ) / 潘綱大(パン・ガンダ) / 王渝萱(ワン・ユーシュエン) / 賴澔哲(ライ・ハオジャヤ)

👁️👁️ みどころ

台湾の夜市は日本人に大人気の観光名所だが、あんなに人が集まったところで無差別銃乱射事件が勃発したら？銃乱射事件はアメリカの専売特許ではなく、18歳の少年の手によって台湾の夜市でも起きたが、それは一体なぜ？

再開発を巡る立ち退き問題は台湾でも日本以上に深刻だが、1人のジャーナリストがそれを取材している中で無差別銃乱射事件に巻き込まれたから、さあ大変！彼は九死に一生を得たが、あの死者は一体なぜ？

もし「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら・・・？」と同じような“歴史上のif”に基づく「3話構成」の本作は興味深い。そのため、第58回金馬獎をはじめ多くの賞を受賞したが、無差別銃乱射事件の動機となった少年の心の中に潜む闇を、あなたはどうか読み解く？



■台湾の夜市で無差別銃乱射事件が勃発！■

アメリカでは痛ましい無差別銃乱射事件が多発しているが、その根本原因はアメリカでは自衛のための銃の保有が認められていること。その点は日本と大違いたが、日本と同じように銃の保有が禁じられているはずの台湾でも、18歳の誕生日を迎えたばかりのジャン・ウェン(ホアン・シェンチョウ)による無差別銃乱射事件が勃発！

アメリカではその舞台(?)は学校内が多いが、本作に見る銃乱射事件の舞台は、日本人観光客に大人気の夜市。台湾の夜市は狭い通路をたくさんの人が行き交っているから、そこで「あいつ、銃を持ってるぞ!」と騒がれる中で無差別銃乱射事件が起きれば大変だ。ジャン・ウェンの使用した銃がアメリカで販売されているような本格的なものでなく、改造した空気銃だったため、死者が胡智盛(シャオセン)(賴澔哲/ライ・ハオジャヤ)1人だけだったが、発生した怪我人は多数に上ったらしい。

本作は冒頭、店頭の檻の中に入っている一匹の犬をジャン・ウェンと親友のアーシン（パン・ガンダー）の2人が逃がすシーンから始まる。せつかくの2人の好意（？）にもかかわらず、この犬が再び檻に戻ってくるのがこの冒頭シーンのミス（オチ？）だが、これって一体何を象徴しているの？

■□■TVゲーム「王者の世界」に注目！このタイトルは？■□■

私は（無料の）TVゲームは一切やらないし、ネットで（有料で）配信されているTVゲームも一切やらないから、本作冒頭のシーンに続いて登場する、「王者の世界」なるTVゲームのことも全くわからない。スクリーン上を見ていると、これは、私が昔流の“劇画”として知っている面白そうなTVゲームだが、スクリーン上でそれを楽しんでいる（演じている）のは、公務員の中年男シャオセンと高3の女の子、リンリン（ワン・ユーシュエン）の2人だ。

ジャン・ウェンは両親が離婚したため、今は財力のある父親の下で厳格に育てられているらしい。しかし、そんな状況下でもゲームに影響を受けた彼は、大学への入学を当然のように言っている父親の目を盗んで物語を書き、アーシンがそれを漫画化した上でネットに投稿していた。

しかして、本作の原題は『該死的阿修羅』、邦題は『ガッデム 阿修羅』だが、これって一体ナニ？

■□■再開発を巡る記者の取材レポートが本作の基に！■□■

私は約40年間、都市問題、再開発問題を弁護士としてのライフワークにしているが、リンリンが住んでいる黎明アパートの再開発問題を取材しているジャーナリスト、メイ・ジュンズ（モー・ズーイー）も、台湾の再開発を巡る立ち退き問題に大きな興味と関心を持っているらしい。リンリンは授業中、密かにTVゲームを楽しみながらも、数学を教えている先生の質問への答えをすぐに引き出すことができるほど頭のいい高3の女の子だが、劣悪な黎明アパートの中で酒びたりの母親と2人で生活していたから、小遣い稼ぎのために援助交際も・・・？そんなリンリンがメイ・ジュンズの再開発問題の取材対象として適しているかどうかは疑問だが、何でもあけすけに本音を語ってくれるという意味ではメイ・ジュンズは目の付けどころがシャープ！

他方、そんなリンリンがTVゲーム「王者の世界」で一緒に楽しんでいた中年男シャオセンには、広告会社で働いている美人の恋人ピータ（ホァン・ペイジア）がいた。しかし、何事にも優柔不断でTVゲームにハマっているシャオセンと、第一線でバリバリ仕事をこなしているキャリアウーマンのピータとの間には今、隙間風が吹いているらしい。

ジャーナリストのフー・ムーチンによる無差別銃乱射事件に関する取材レポートが基になっている本作は、以上に紹介した男4人と女2人が、夜市でのジャン・ウェンによる無差別銃乱射事件を巡って織りなす社会派サスペンスドラマだから、まずはこの6人の主人公のキャラをしっかりと確認しておきたい。

■□■全3話構成だがその意味は？歴史上のifってあり？■□■

私は中学時代から物理や化学は苦手だが、日本史、世界史は大好きだった。「歴史は年代を丸暗記しなければならないから嫌い」という人もいたが、私はそうは思わない。「もし、クレオパトラの鼻がもう少し低かったら・・・？」という“歴史上のif”を考えながら、歴史上の事実についての“物語”を考えていけば、歴史は面白い科目だった。しかして、全3話構成とされている本作の第1部では、厳格な父親の下で大学進学、アメリカへの留学等が至上命題とされ、「俺は（冒頭に見た）檻の中の犬と同じ“囚われの身”だ」と思い込んでいるジャン・ウェンが、鬱積した気持ちから抜け出せないまま、ある日、夜市で銃乱射事件に至るストーリーが描かれる。

夜市は日本人観光客には観光名所だが、台湾に住んでいる人々には日常だから、そこには、ある偶然からメイ・ジュンズがいたし、シャオセンもいた。メイ・ジュンズはうまく身を隠しながら、ジャン・ウェンが銃を乱射する姿の一部始終を目撃していたが、シャオセンの方は間が悪く、ジャン・ウェンが発射した弾に当たってしまい、唯一の死者になってしまったから、アレレ。もちろん、ジャン・ウェンはすぐに逮捕されたが、アーシンが言うように、18歳の誕生日を迎えた直後だったから「少年法」は適用されないことになる。そこでアーシンは、第1に犯罪に至った動機、すなわちジャン・ウェンの心の中に巣食っている社会や家庭に対する不平不満をぶちまけて弁明し、第2に被害者に謝罪し、第3に父親の金で被害者に被害弁償し、第4に弁護士を通じて被害者と示談をするよう説得したが、さて、ジャン・ウェンは？

フー・ムーチンの3つのレポートを基に映画化された本作が面白いのは、そんな「第1話」をベースとした上で、「もし・・・だったら？」という“歴史上のif”の視点から「第2話」、「第3話」を構築したこと。夜市で銃乱射事件が勃発したことや、そこでシャオセンが死亡したこと自体は動かしようのない事実だが、「もし〇〇がいたら・・・？」、あるいは「もし〇〇がいなかったら・・・？」、そんな“歴史上のif”はいくらでもあり得るはずだ。しかして、本作の「第2話」、「第3話」が描く“歴史上のif”とは？

■□■第58回金馬獎等々を受賞！その問題提起に注目！■□■

本作のホームページには「6人の運命は、あの夜一変した。」「善になるも、悪になるもタイミング次第なのかもしれない。」との“見出し”で、本作のポイントが紹介されている。2022年3月に台湾で公開され話題を呼んだ本作は、2021年の台湾のアカデミー賞とされる金馬獎でワン・ユーシュエンが最優秀助演女優賞に選出された他、2022年には台北映画祭の台北電影獎で、脚本賞、音楽賞、最優秀助演女優賞を受賞した。また、2023年米国アカデミー賞では、国際長編映画賞部門で台湾代表作としてエントリーされた。

18歳の誕生日を迎えたばかりのジャン・ウェンと同級生のアーシンはもともと親友だし、シャオセンとビータはその仲に波風こそ立っているものの恋人同士だが、この両者にはもともと何の接点もない。他方、黎明アパートに住む高3のリンリンは母子家庭の孤独な身だが、持ち前の美貌と勝気な性格、そして頭の良さを生かして、一方ではゲーム「王者の世界」を通じてシャオセンとの接点を深めていたし、他方では再開発の取材を通じてジャーナリスト、メイ・ジュンズとの接点を深めていた。

そんな本作の主人公たる6人の男女の運命が交錯したのは、あの日の夜市だ。無差別銃乱射事件はアメリカの専売特許ではなく、台湾でも起きたわけだが、それは一体なぜ？ジャン・ウェンはなぜあの日、あの夜市であんな行動をとったの？ジャン・ウェンはなぜTVゲーム「王者の世界」の物語を書いていたの？ジャン・ウェンの心の中に潜む闇は一体何だったの？ジャーナリスト、メイ・ジュンズの黎明アパートを巡る再開発の取材は一体何だったの？もしあの時、〇〇が、そして△△が、あの行動ではなく別の行動をとっていたら・・・？無差別銃乱射事件の動機となったジャン・ウェンの心の中に潜む闇を、あなたはどうか読み解く？

クレオパトラは紀元前44年にシーザーが暗殺された後、アントニウスと愛し合い、ローマ＝エジプト連合を夢見たが、紀元前31年のアクティウムの海戦によって、シーザーの正当な継承者を自称するオクタヴィアヌスによって滅ぼされてしまった。しかし、もしクレオパトラの鼻がもう少し低かったら、シーザーとクレオパトラとの恋はなかったし、シーザーの死後、アントニウスとクレオパトラの恋もなかったのかも・・・？

そんな“歴史上のif”も興味深いが、もしビータがあの夜市でシャオセンと待ち合わせの約束をしていなかったら・・・？その他いろいろな歴史上のifを考えると、前述した本作のホームページの見出しはなおさら興味深い。本作の問題提起とそんな歴史上のifは、「第2話」、「第3話」でしっかりと！

2023（令和5）年5月30日記